

レク指導者が地域スポーツにはたす役割

制度ボランティアの関わりから

体育指導委員・レク指導者・地域スポーツ

○杉本 晴夫（船橋市自遊人協会）
 宮下 桂治（順天堂大学）
 戸田 安信（船橋市自遊人協会）

（1）実践活動のはじまり

1980年（昭和55年）4月、私の居住している地域の自治会会長から、体育指導委員の推薦を受け、船橋市から任命されたことが、今回の実践報告につながった。

それまでも、他の自治会のスポーツクラブで活動をしていたので、この体育指導委員制度の存在を知ってはいたが、以後、12年間（任期2年の6期）の活動を実践し現在は、船橋市自遊人協会の会長をしている。

（2）体育指導委員の活動の意義

体育指導委員は、社会教育法及びスポーツ振興法の法律で市町村に設置義務のある、ボランティア活動の一つで、制度ボランティアである。

身分は、非常勤公務員で活動時に傷害を受けた場合は、市役所の課長と同じ待遇での保障がされている。（傷害保険）

当時の船橋市は、1980年（昭和55年）4ブロック 150人が活動しておりましたが、その後の1984年（昭和59年）には、5ブロック〔23地区〕 200人となり現在にいたっている。

これを船橋市の人口53万人を 200人で割ると、体育指導委員の一人当たりの担当人口は2650人となる。住民ニーズにこたえる活動は困難である。

私の地域は、船橋市内でも新興住宅街のひとつで、居住者はこの地区に転居してきて東京で働く通勤者がほとんどである。

（3）地域実践活動の経過

活動は、前任者の行っていた年間行事をそのまま引き継ぎした形で始まった。それは、私も含めて地区の12人中11人が新任という状態である。おまけに、主婦が3人、東京で働き寝に帰るサラリーマンが9人という内訳で、これでは、まったく新しい事業をやる余裕は持てなかった。

引きついた事業は、すべて一過性のもので、スポーツ種目の大会・ママさんバレーの大会・男子と女子のソフトボール大会・夏休みの少年少女スポーツ大会などの地区事業と船橋市内全域を対象とした中央大会のお手伝いだった。これらは、スポーツの好きな人達だけが対象だった。

2年目からは、1年目の体験から地区の新しい事業の検討を始めた。その検討したことは、いわゆるスポーツに縁の無い人にも参加してもらうにはどのようにしたらよいかである。具体的には、“歩ける人”以上を対象とした「歩け歩け」を導入したことにある。

場の確保として、地域内の学校開放・体育館の土日の夜間の開放は、限られたスポーツ

種目のみでしたので、校庭開放（休日）を学校と交渉をし具体化した。

愛好者の増えたバレーやソフトは、大会だけではなく日常の活動として「リーグ戦」の組織化を促進するなどをしましたが、これは市内でも特徴的な活動だった。

事業を一つ増やすことは、企画から実施までの準備作業（時間）が増加し、会社から帰った毎日、行事の準備・実施の土日祭日を入れれば 365日が体育指導委員としての活動だった。

日本レクリエーション協会の存在は知識として知ってはいたが、地域の活動の中にはレクリエーション指導者の存在は、見えなかった。

（４）制度ボランティア活動の問題

体育指導委員の任期は２年で、毎回２～３割が入れ替わる。新しい体育指導委員をお願いすると、今まで学校のPTA、自治会の役員などことわり慣れているので、断る理由は山ほどでてくる。例えば「私には出来ない…」「定年になったら…」「忙しい…」あげくのはてには「私の事をだれが言ったんだ…」などである。推薦者が制度ボランティアを良く知らず員数合わせ的に推薦してくる、一般に言われているボランティアと、制度ボランティアの違いが判っていない。

任命されてからの任務として存在する、地域レベルの事業や市レベルの事業、運営の会議などを、いろいろな理由で欠席をしたり、自分の好きなスポーツでないと言うことで出席しない人もある。

体育指導委員に求められる資質としては、(1)協調性 (2)積極性 (3)サービス心 (4)自己研さん（向上心）が要求されている。しかし、体育指導委員の指導委員と言う言葉に勘違いして自分が偉くなった気になってしまう人もいる。地域の活動としてはとても一人で行えることでもないので、体育指導委員会としての組織の活動が必要になる。気持ちの持ち方として「してやっている…」とか「やってやる…」などではなく、「させていただく…」という感謝の気持ちを持つことが必要である。

（５）レクリエーション指導者への提言

地域でのスポーツ活動を支援する体育指導委員の実践体験から、個人的に船橋市スポーツ健康大学や千葉県社会体育指導者などの研修に出席し、レクリエーションとの関わりをもつことになった。地域における生涯スポーツは、勝負を重点に置くことなく「楽しければ良い」、いわゆるレクリエーションでいいのではないかと思うようになった。

レクリエーション指導者は、過去に「軽スポーツ」とか「レクスポーツ」などと呼ばれてきた、現在の「ニュースポーツ」の先駆者的役割を果たしてきた。また、一定レベルでの学習も終了している。ただそこの住民であることだけを理由に推薦される人よりも、いまこそ地域住民に、「楽しいスポーツ」として「生涯スポーツ・レクリエーション」を普及推進する役割を積極的にはたす時がきたのではないか。

「生涯スポーツ」が大きく伸びて定着するには、ボランティアな活動をしてきたレクリエーション指導者>が、制度ボランティアである<体育指導委員>になって、普及活動をすることが、一般市民の明るく健康な余暇生活の充実へ一層大きな力を発揮するものと思う。具体的には、地域で行われている体育指導委員の事業にまず率先して参加し実態や実情を知ることから始め、自分ならこうすると考え、自分を地域の人達に知ってもらうべきである。